

タイトル：2022 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No.14)

日時：2022年11月17日（木）10:00～12:55

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut
Central District

Who are “good quality soldiers”? The intersectional approach of gender and ethnicity in Israeli militarism”

澤口 右樹（東京大学大学院総合文化研究科 博士課程）

本報告ではイスラエルのミリタリズム、すなわちイスラエル国防軍（IDF）とその兵士の政治・社会での中心的な役割を強化するイデオロギーについて報告した。ミリタリズムによって、「良い兵士」はイスラエル社会で特権的地位を占める。しかし、この兵士の「質」はイスラエル社会の文脈によって社会的に構築されたものである。本報告はジェンダーとエスニシティのインターセクショナルリティ（交差性）に注目し、「良い兵士」がジェンダー規範、またエスニシティ文化によって構築されることを指摘した。これは兵士たちのエージェンシーを制約するのと同時に、一定の可能性を与えることもある両義的側面を持つことを明らかにした。

イスラエル建国のナショナリズム運動であるシオニズム運動は、男性性を重視する姿勢、ヨーロッパ性を近代的とするオリエンタリズムを前提視した。これにより、IDFはヨーロッパ出自のユダヤ人（アシュケナジーム）男性を「質の高い兵士」とみなし、中核的構成員として動員した。一方女性は女性性を弱さとするジェンダー規範によって従軍部隊を制限され、また中東・北アフリカ出自のユダヤ人（ミズラヒーム）は「アラブ的＝野蛮」とするエスニシティ文化によって最前線の部隊に動員された。さらに、インターセクショナルリティの観点から、アシュケナジーム女性はそのヨーロッパ性のため IDF で有利な地位を得ることもあること、同時にヨーロッパ的女性として性的客体になること、ミズラヒーム男性は野蛮さを勇敢さとして再解釈できること、ミズラヒーム女性は両者の不利益を重層的に被ることを指摘した。男性と異なり、女性はジェンダー規範やエスニシティ文化について再解釈するエージェンシーはより多様な可能性と制約があり、特にミズラヒーム女性はより脆弱なエージェンシーしかない一方、アラブ性と女性性を交差させる新しい可能性も（少ないながら）あることを明らかにした。

上記の報告に対し、コメンテーターのドゥ・ドゥルゲン先生から主に2点のコメントをいただいた。1つ目として、本報告は理論枠組みとしてインターセクショナルリティを垂直的（構造の歴史的発展）と水平的（個人の解釈）の2つに分けて議論しているが、これらの連関が不明瞭という点であった。ドゥルゲン先生は、構造とエージェンシーの関係として整理し、インターセクショナルリティがこの2つのレベルで複雑な関係にあることを強調すべきと提案された。2つ目として、ナラティブ分析の結果を構造への分析と対応させ、エージェ

ンシーと構造との動的な交渉のプロセスを描くこと、また両者のズレや両義的關係について分析すべきと提案をいただいた。その他、先行研究も整理していただき、本報告のオリジナリティについても積極的に評価していただいた。

本報告会は、報告者にとって普段参加する研究会の聴衆とは異なる方々に自分の研究を報告する貴重な機会となった。ドゥルゲン先生はそのような聴衆のお一人であり、また上記のような非常に示唆に富んだコメントをいただくことができた。イスラエル地域研究という狭い分野を超えることの意義を強く感じる報告会であった。この有意義な機会を提供していただいた、また渡航前・後、さらに現地でも大変お世話になった東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の先生方及びスタッフの皆様、特に黒木英充先生、篠田知暁先生、千葉淑子様には心からの感謝を申し上げたい。